

「教学上の基本問題」について(6・30)
<http://norimaki.faithweb.com/toda.htm>

一、戸田会長の悟達・創価仏法の原点

資料

原島 それから創価学会再建への獅子奮迅の戦いのなかで、戸田前会長は法華経の講義に全魂を傾けられますね。出獄後直ちに法華経を講義されたのも、獄中の悟達を弟子達に伝えたかったからだ。「人間革命」には記されております。

それは、戸田前会長の悟達の大生命に回転していく法華経であったと思うのです。あえていえば、法華経を媒介としてご自身の境地を開き“生命”そのものに迫っていかれた……。

会長 創価仏法の原点は、いうまでもなく戸田前会長の悟達にあります。

(池田会長てい談「法華経の展開」大白蓮華 49年4月号)

又自分は文底唯一の教理を説いて居ると深く信じて居るが教本には文上の法華経を用いて居る。

此の二つの罪は御本仏の許す可らざるものである。私は大難をうけたのである。立つ可き秋に立たずつく可き位置につかず、釈迦文上の法華経をもてあそぶ者として大謗法の罪に私は問はれたのである。

有り難や、死して無間地獄うたがいなき身が御本尊の功德は有り難く現世に気づくことが出来たのである。

(戸田城聖論文「創価学会の歴史と確信」)

質問

戸田前会長の悟達は法華経を媒介として悟ったということですが、法華経の付属をうけてその文底真義を弘められる方は大聖人お一人の筈であります。しかるに戸田会長の法華経による悟達を立てるならば大聖人の仏法は要らなくなると思いませんか？ また、戸田会長自身かつて法華経の講義をしたことにより罰を受けた(妙悟空 人間革命)といわれています。このことと法華経による悟達の間をどのように会通されますか？

答え

戸田第二代会長の、いわゆる“獄中の悟達”については、どこまでも大聖人の仏法を古今の教えのなかで最高のものであるということを知り、大聖人の南無妙法蓮華経を広く流通していくべき使命の自覚に立たれたということでもあります。すなわち南無妙法蓮華経の大慈大悲に包まれた境涯に感涙したという意味でありました。それが日蓮大聖人の御内証と同じであるとか、大聖人の仏法とは違う仏法を創造したと受けとめてはならないことです。

戸田第二代会長が、後に法華経を講義したために罰をうけたというのは、第二代会長は、大聖人の仏法の文底から解釈していったつもりでありましたが、受講者にとっては、いつのまにか文上に流され、その理解にとどまったことをいったのであります。

資料

戸田前会長は、牢獄の中、御本尊のないところで、大宇宙に向かって二百万遍の題目を唱え、法華経を色読され、地涌の菩薩の棟梁としての開悟をされた。

(池田会長指導「前進」52年6月号)

質問

地涌の菩薩の棟梁とはいうまでもなく上行菩薩であります。すると戸田前会長は上行菩薩として自身を開悟しその行を行じたのですか。そうすると大聖人は必要ないことになりますね。

答え

戸田第二代会長のことを「地涌の菩薩の棟梁」といったことがあります……これは在家における折伏弘教のう

えの指導者という意味で使ったのであり、戸田第二代会長みずからいわれた言葉でもあります。

ただし、不本意ながら、文は意を尽くさずで、要旨としてまとめたとき、文脈上、上行菩薩の再誕即御内証は久遠元初自受用報身如来の再誕・末法の御本仏日蓮大聖人に通じるかのような文体となってしまう場合もありました。したがって、今後こうした言葉遣いについて十分注意していきます。

【戸田会長の「私は地涌の菩薩の棟梁である」発言】

戸田会長全集第4巻

◆ すべての分野の指導者に 第二回男子青年部総会

さきほど辻君が、折伏の仏であるといわれたが、仏は末法には日蓮大聖人様以外にない。これは訂正しておく。しからば、私は凡夫である。

仏法に、外用内証という働きがある。

日蓮大聖人様の内証は、無作三身の如来である。私の内証は、地涌の菩薩の棟梁である。外用は、折伏の大將である。

(昭和二十八年十二月二十三日 東京・星薬科大学講堂)

◆ 福運を開く信心をせよ 九月度幹部会

毎回のことではあるが、個人的な話し合いのつもりで聞いてほしい。みなさん方の誠意で、このたび本部の買い取りが決定したことは、なんととっても喜ばしい。

次に、蒲田がいよいよ千世帯を突破し、蒲田の一地区が小岩を破っている。支部長、地区部長、班長といえども、小岩以下の支部の幹部は、肚を決めよ。

ここに大きな問題がある。白木君は、あらゆる面で福運をうけている。長たる地位にありながら、闘争力のないものには福運がでない。いくらみなさんが折伏しても、私からは一銭も月給をやらぬ。一生懸命、学会の大打進に助力してもあたりまえ、へまをやれば文句をいわれる、ずいぶん気の毒だと思う。それでいやならよしなさい。

地涌の菩薩の棟梁なる私と約束した眷属がかならずいて、働くことにきまっている。

しかし、あなた方へのごほうびは、大御本尊様がきちんとくださる。かりに、いま私が、あなた方から聴講料をもらったとしても、たった二十万円のはした金です。大御本尊様からいただく功德とは問題にならぬ。大御本尊様に、静かにお題目を唱え、自分の福運の開き方を願うだけの、班長、地区部長、支部長であってほしい。

(昭和二十八年九月三十日 東京・豊島公会堂)

.....
戸田会長全集第6巻

◆ 諸法実相抄講義（御書全集一三五八ページ）

このたびこそは信心をきちんとやって、日蓮が弟子としてこの世の中を渡り、これは大聖人の弟子ですが、このたびこそは広宣流布のさきがけとして、戸田城聖の弟子としてとおしたまえ。霊鷲山会にいったときに、広宣流布の棟梁たる戸田城聖の弟子であるとして、堂堂と大聖人にお目通りしたまえ、諸君。

日蓮の弟子ときまれば地涌の菩薩である。地涌の菩薩なら久遠の自受用身の御当体である。いま大聖人滅御約七百年を過ぎて、広宣流布をなさんとするわれわれ同士は、地涌の菩薩でなければ絶対にできない。

地涌の菩薩と定まれば、思うとおりの生活ができないわけは絶対にないのです。

(昭和三十一年八月八日 総本山大石寺・客殿)